大月の永平寺は、樹々の影に坐し、峯々の風に涼んでいます。永平寺では、毎年十月になりますと「達磨講式」を修行いたします。

達磨講式とは、達磨大師さまをお偲びし、そのご遺徳を念じ讃えるものです。達磨大師さまは、お釈迦さまから数えて二十八代目のお弟子さまで、インドから中国へお釈迦さまの坐禅をお伝えになられた和尚さまです。七転び八起きで知られ、赤い衣を纏い「坐禅」をしている様子がよく描かれます。

さて、「坐禅」とは、何にもとらわれることなく、ものごとを真っすぐにとらえる姿です。

よく「人生の三不知」と言われますが、過ぎ去ったものごとを戻すことはできません。また、未だ来ぬ先のことはわかりません。そして、今この時も、例えば自分の体のことであっても、何が起きているのか図り知ることは難しいものです。しかし、過去や未来はともかく、今にとらわれたっていいじゃないかと思うかもしれません。確かに「今このとき！　このとき！」と、二度とない今を大切に生きることは大切ですが、毎度そればかりでは疲れてしまいます。

過去にも未来にも、「今」にもとらわれず、力を入れず心をも費やさずして、当たり前の日常を大切に生きていくことそのものが坐禅の生き方なのです。

私たちは、老いや病、別れなど、くるしみの多い世の中を生きる中で、時に、どうしようもない悲しい思いに苛まれる時があります。その様な中で、眼に涙し、歯を食いしばりながらも、静かに坐り、何とか生きていこう！と立ち上がる。それが達磨大師さまの七転び八起きの生き方なのです。

朝夕の坐禅をつとめ、達磨講式を修行して、達磨大師さまの姿をわが身に温めながら、峯々を撫でる風の如くに、涼やかに日々を修行してまいりたいと願うものであります。

南無震旦初祖円覚大師菩提達磨大和尚

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより
大本山總持寺【冬安居入制と御両尊御征忌会】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一

耐震改修を終えた紫雲臺

修行の立場から見ると時節はもう冬ということになり、總持寺では十月より冬安居制中に入ります。

冬安居制中は年明けの正月半ばまでの一〇〇日間、首座和尚を中心に修行僧たちの集中修行が続きます。

また、十二日（土）から十五日（火）までは、ご開山瑩山禅師・二祖峨山禅師（お二方あわせて御両尊と称します）をお慕いしての「御両尊御征忌会」が行われます。

この期間中、全国から選ばれた焼香師さまが江川禅師さまのご代理として法要の導師を務められ、ご寺院・檀信徒の方々も大勢参集して報恩の誠が捧げられます。

さて、大遠忌記念事業として二年半前より大規模な耐震改修工事に入っておりました紫雲臺と虎嘯窟が、この度無事に竣工し、この七日に落慶法要が営まれます。

特に紫雲臺は、長い間掛けられていた素屋根が取り外され、再びその壮麗な姿を観られるようになりました。

また仮設廊下も取り外され、御征忌会には紫雲臺の廊下を通って大祖堂への行き来が出来るようになります。

そして御征忌会が終わりますと、いよいよ十一月二日（土）から五日（火）まで奉修する独住第四世中興・石川素童禅師さま一〇〇回御遠忌に向けて歩みを進めます。特に三日には「夢ひろば」も境内を開放して催され、石川禅師さま御遠忌の記念に「みこし二基」が参道から仏殿まで勇壮に練り歩きます。

俳壇 曹洞

選・坊城俊樹

背を洗ふことなき父の墓洗ふ

宮城県　髙橋　靜子

評　父上が亡くなって少し経ってからの句か。そういえば、お父さんの背中を洗ったことがあったっけ。もう父の背中を洗うこともかなわない。お盆のころの墓参をし、その墓を洗うたびにそんな回想に包まれる。

猫座り直して涼し土の上

愛知県　松井　暁見

評　ちょっと季節の盲点をつかれた感じがある。そういえば、猫や犬は真夏の暑いときには、幾たびか、座ったり、寝そべっている位置を変える。新しいひんやりとした土の上に寝そべりたいからなのである。

◆八月の重き記憶に鐘の音　山口県　中井　清子

◆夕端居潮の満ちくる音の中　兵庫県　内藤　昭子

◆精霊の眠る寺院の四葩かな　埼玉県　橋本　永子

◆梅雨最中どんな雨にも傘をさす　東京都　藤森　荘吉

◆石庭の砂紋正しき沙羅の花　大分県　久恒　大輔

◆子らの声路地にみなぎる梅雨晴間　和歌山県　田﨑　よし子

◆等身の菩薩と分かつ秋思かな　東京都　小林　春江

◆夕焼を背負ひ疲れし野良帰り　秋田県　小田嶌　恭葉

◆燕の子預かる土間の梁太く　島根県　俵　保恵

◆海霧の粒子をまとふ手摺かな　岩手県　阿部　凞子

選者吟

夏怒涛はらほげ地蔵はらほげて

俊樹

作句小見　これは壱岐に行った際に作った、最新の作である。「はらほげ」とは「腹が削れた」ということらしい。七体のお地蔵さまが海岸に立って居る。そこに大波が来て、長い年月にお腹を削ってしまったらしいのである。

曹洞俳壇・歌壇

選・長澤 ちづ

梅雨冷えの風に沖より圧されくる海霧は湾を灰色に覆ふ

岩手県　阿部 瀝子

評　東北地方の太平洋側に吹く夏の東風はヤマセと呼ばれ、寒流の親潮の上を吹いてくるため冷たく、稲や農作物の成長を妨げる。掲出歌の措辞には梅雨冷えを憂うのみではなく、冷害で苦しんできた歴史的背景を想起させる力がある。

寺庭のトマトは半分取り残す庵主さんたらカー子の分と

静岡県　杉原 民子

評　カー子はカラスに庵主さんが付けた名前だろう。下の句の口語調が、作者と庵主さんとの親密さの度合いを示し、それによって作者の多少の非難がましさも救っている。

◆海霧の五大堂をば煙らせて透かし橋ゆく人らそろりと
島根県　横山 棗吾

◆研ぎ鎌の切れ味そっと指に撫で挑む草刈り夏の陣かな
三重県　西村 廣視

◆下ろしたての鎌半日の草取りですでに錆びつき風格かもす
秋田県　小松 紀子

◆ラジオより相撲流れる畑にゐて小松菜間引く力も入る
山梨県　北村 富子

◆スズメ蜂の大き死骸を巣穴へと次々蟻来て休まず運ぶ
長野県　山﨑 さと子

◆白滝の如き若葉は木天蓼（またたび）ぞ秋の蔓取り友と来んとす
福島県　西木　甚

◆富士山の裾野千里の芒原夜すがら照らす月のさやけさ
静岡県　土屋 きみ江

◆尾道は港と古寺と路地の町時は静かに猫も悠々
広島県　小畑 宣之

◆はだしにて渚に佇てば水無月の波が踝（くるぶし）の砂をまさぐる
福岡県　三吉　誠

◆夫逝きし日から諳んずる般若心経ひと月を経て星空仰ぐ
北海道　明珍 郁子

選者詠

河原鳩の首の緑金陽に映えて遠く見つめる水平線を
ちづ

作歌小見　投稿くださるのはご高齢の方が多く、こちらがいつも励まされます。西木甚さん九十四歳、木天蓼の花が咲くころ、葉が白くなる様を滝に喩えて美しい。土屋きみ江さんは百歳とのこと、サ行の調べが耳に心地よく月光の澄明感に相応しい。

【作品お待ちしています】ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々にP23掲載の送付先までお送りください。